

文部科学大臣 萩生田光一 様

文化庁長官 宮田亮平 様

(文面)

表現の自由ということに関して今回とても考えさせられました。

私自身、ごく少人数で立ち上げた、京都市内での、ある「芸術祭」の立ち上げと運営に携わっています。その「芸術祭」は合計3回行いましたが、1回目は持ち出しで立ち上げて借金、2回目は公的な助成金をもらいつつ、足りない分は借金でした。そこで、3回目に、いわば歌舞伎の「タにマチ」のような感覚で、社会での「オモロイこと」に出資してくれる人を募るべく、「ヒトハダヌイダーズ」と銘打って、民家や企業を一軒一軒まわり、自分たちの企画の趣旨を説明し、祭りへの参加を呼び掛けながら、自分たちには十分な資本がないので協力をお願いしたいとまわりました。その結果、複数の方に賛同して頂き、様々な形で協力をお願い出来ました。それでも、それだけでは運営できず、公的な助成金にも頼り、なんとか赤字は出さないラインで終わりました。

もっといろんな人が賛同し、お金が動くような芸術の在り方が望ましいと考えています。けれども、この国でそれが育っていない以上、公的なシステムに頼らなければ芸術活動を成り立たせることは至難であると感じています。

私は今回結局表現の不自由展を見ることが出来ませんでした。見ることが出来ない人があまりにも多すぎて、作品を差し置いて議論が机上で行われている感覚があり、それを目にするのは私としてはとてもしんどい思いをします。そして、表現の不自由展に賛同する立場、反対する立場双方が友と敵に分かれてしまっているかのように見えるこの状況は良くない状況だと感じます。作品を宙ぶらりんにして政治的な駆け引きばかりが起こっているかのように見える昨今の状況には賛同できないのですが、そのことに追い打ちをかけてしまうかのような今回の助成金不交付の決定には、反対の声をあげたいと思います。これは、文部科学省、文化庁が敵だという態度ではなく、良識の在る政治を求めたいという私の気持ちがある、ということを申し添えたいと思います。友と敵に分かれやすいこの状況において、助成金不交付の理由を政治的な説明に終始させて一方的に不交付としてしまうのは、この社会において何も良い影響を残さないのではないかと私は考えます。つまり、反権力という立場からこの意見を言っているのではなく、よりよい社会の実現(それが政治の果たす役割であると思いますが)ために、今回の決定には反対である、ということを主張したいという意見です。

その後の映画『宮本から君へ』文化庁助成金(1000万円)取り消し、「KAWASAKI しんゆり映画祭」(川崎市 600万円、文化庁助成金 98万6000円支給)での『主戦場』上映中止などにも、こういった流れが出来てしまっているようにも感じます。

とにかく、息苦しい。生きづらい、そういう方向に行ってしまう気がしてなりません。「社会」はそういう手続き一つ一つで出来上がってしまうと思います。こういう雰囲気を作るのは良くないと思うのです。

一度助成金を出した企画には責任をきちんと持ってほしいです。それは、一度助成金を出したものを、それを取り消すというのは相当の社会への悪影響もあり、ものすごい破壊力を伴うことだと思うということです。それをお伝えしたいです。

竹村望

2019 年 10 月 31 日